

特集 日本の仮面

能狂言面の神と鬼

二〇一八年三月二十日(火)～四月二十二日(日) 東京国立博物館本館14室

参考：能狂言絵巻「賀茂」



能面 増女

Noh Mask, Zo'onna type

「天下一近江」焼印

江戸時代・17～18世紀 C-166



能面 大飛出

Noh Mask, Otobide type

江戸時代・18～19世紀 文化庁

能には生きている人間だけでなく、さまざまな神や鬼、あるいは妖怪、亡霊、怨霊などが登場します。能楽師はそれぞれの役にあう装束と、ふさわしい表情の面を着けて演じます。

たとえば、国土の安寧や五穀豊穡を祈る翁舞では、翁、三番叟などにこやかな神の面をつけて舞います。女神や天人の役を演じる際、やや冷たい表情の増女をつけると品格の高さが漂い、眼が金色の泥眼をつけると凄味がにじみ出るはずです。荒ぶる神の役に用いる悪尉からは威厳を感じるでしょう。嫉妬のあまり正気を失い、鬼女や生霊となってしまう女性役に用いる生成、般若などは恐ろしげですが、その裏には恨みに囚われた自身を嘆く哀しみが表現されています。大自然を象徴する龍神、雷神、山姥などの役に用いる面からは何を感じられるでしょうか。

満開の桜や目には見えない恋心などさまざまなものを、観る人の想像にゆだねるのが能や狂言の特徴です。ぜひ想像しながら、神と鬼の表現をお楽しみください。

Thematic Exhibition

The Masks of Japan: Gods and Demons in Noh and Kyogen

Room 14 of the Honkan, Tokyo National Museum

Tuesday, March 20 – Sunday, April 22, 2018

Noh and Kyogen have been performed for centuries in Japan, with Kyogen plays serving as comic interludes in between acts of Noh. These performing arts feature not only human characters, but also supernatural figures such as gods and demons. When playing these roles, actors wear distinctive masks that are of central importance to the performances and aid the audience in using their imaginations to flesh out the stories portrayed.

A variety of masks have been created for depicting these roles, which include smiling gods that bring peace and bountiful harvests, beautiful goddesses with airs of nobility, and even violent deities that represent the destructive power of nature. This exhibition also features masks portraying demons, monsters, and *tengu*, which are winged creatures that terrorize humans with their unearthly powers, as well as masks portraying women who were driven mad with jealousy and turned into vengeful demons or spirits. We invite visitors to enjoy the stunning forms and rich variety of these Noh and Kyogen masks.

能楽と能狂言面

奈良時代に大陸から伝わった芸能「散楽」を源流とし、平安時代に成立したのが猿楽。この猿楽を共通の祖とし、室町時代に世阿弥が大成した能と狂言をあわせて能楽と呼んでいる。

能、狂言では能面、狂言面を用いる。これらは、能楽で役に変身するための道具である。能楽師は「面」と呼び、「頂いて（礼をして）」から「かける（着ける）」など、非常に大切に扱っている。同じ演目でもどの面を使うかで、役柄の性格が左右されるほど重要な役割をもつのが面である。

能楽の発展とともに、面にもさまざまな形式や約束事ができ、今日の面の基本となるものは室町時代には完成したといわれている。現在は二〇〇種類を超えるといい、大きく、翁、老人、鬼神、女、怨霊、男の六種類に分類することができる。



能狂言絵巻より
「三番叟」

にこやかな神

面のなかでも特別な存在なのが、天下泰平や五穀豊穡を祈る「翁舞」でつける面である。白い顔の神の面が翁。黒い顔の神の面が三番叟。どちらもおだやかな笑みと顔一面に刻まれた皺、特徴的な眉、顎髭が印象的である。顎は動くように作られている。多くの面のなかでも、素顔で登場した能楽師が舞台上で着けるのはこの二面だけである。



能面 翁
Noh Mask, Okina type
室町時代・15～16世紀
C-1879-1



能面 三番叟
Noh Mask, Sanbaso type
室町～安土桃山時代・15～16世紀
C-1879-2

荒ぶる神

荒々しく暴れ、怒りを表わす神などに用いられる面。目鼻立ちがはつきりとし、勢いのある髭が表わされる。大悪尉の「悪」は善悪の「悪」ではなく、強い性格を示している。



能面 大悪尉
Noh Mask, Okujo type
「丹後州／愛若大夫廿三枚之内」刻銘
安土桃山～江戸時代・16～17世紀 文化庁

大自然の象徴



能面 黒髭
Noh Mask, Kurohige type
安土桃山～江戸時代・16～17世紀 文化庁

鬼・怨霊

泥眼は一見、普通の女性のようなだが、眼が金色の絵の具で塗られている。これは人間を超越した存在であることを示す。般若はついに怨霊になってしまった女性の面である。また、恨みに駆られ、蛇の体となってしまった女性の役に用いるのが真蛇。口もとの表現は蛇を連想させる。般若も真蛇も、目に金属を嵌め、角や牙が表現される一方、眉のあたりからは嫉妬にかられるわが身を憂う心が感じられる。安達女は人を喰らう鬼女の面で、耳が鋭くとがり、角や牙が黒く表わされ、獣の雰囲気さえも漂う。しかし、その恐ろしさの奥には、永遠の孤独と戦う鬼女の苦しみが表示されている。



能狂言絵巻より
「葵上」(面は般若)



能面 般若
Noh Mask, Han'nyu type
「近江打」朱書 江戸時代・17~18世紀 C-173



能面 安達女
Noh Mask, Adachionna type
「舞歌」刻銘 江戸時代・17~18世紀
文化庁



能面 真蛇
Noh Mask, Shinja type
「宝生太夫／行年七十四／友春(花押)」朱漆書
室町時代・15~16世紀 文化庁

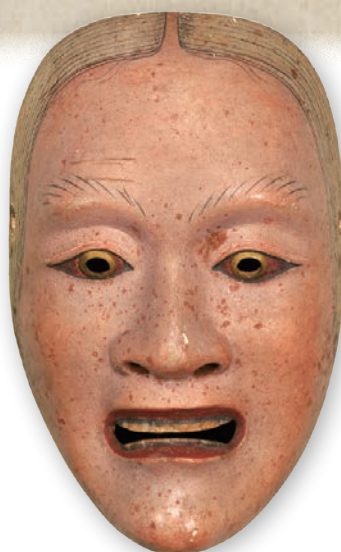


能面 泥眼
Noh Mask, Deigan type
「天下一是閑」焼印
安土桃山~江戸時代・16~17世紀 C-126

ときに恵みをもたらし、ときに猛威を振るう大自然への畏敬は能にも描かれる。龍神の面である黒髭は、顎を突き出し、眼が鋭く、龍を彷彿とさせる。たったひとり深い山に棲む山姥は、妄執の果てに鬼女となってしまう。大自然を象徴する存在とされる山姥の表情には、恐ろしさや邪悪さは感じられない。



能狂言絵巻より「山姥」



能面 山姥
Noh Mask, Yamanba type
伝角坊作 安土桃山時代・16世紀 C-55



能狂言絵巻より「春日龍神」(面は黒髭)

大癡見

特色

眉間が深く、眉、頬が隆起し、特に鼻と上唇の間が盛り上がるのは、ほかの面がない。口を一文字に閉めて力が入る様子が真に迫っている。観世、宝生、金剛の各宗家に古面が伝わり、観世の面の写しが流布した。この面は独創性に富み、大癡見の最優品である。

素材

近世の能面は針葉樹のヒノキで作ることが多いが、室町時代までは広葉樹のクスノキ、カツラ、キリなども用いた。この面は広葉樹で作られ、漆に木の粉などを混ぜた木屎漆で小鼻、頬などを盛り上げ、朱や胡粉で彩色する。頭頂の黒い部分と両耳はヒノキ材を使って補修している。

面裏の刻銘

「佐渡嶋／一透作／久知住」久知は新潟県佐渡島の両津港のすぐ東の地名。一透は江戸時代の喜多古能編『面目利書』によれば、赤鶴の異名である。しかし、世阿弥の『申楽談義』には「近江には赤鶴、鬼の面の上手なり」と記される。赤鶴の情報は非常に少ないので、この面の「一透」と赤鶴の関係ははっきりしない。



能面 大癡見

Noh Mask, Obeshimi type

「佐渡嶋／一透作／久知住」刻銘 室町時代・15～16世紀 文化庁

大天狗の役に用いる面で、大聖寺藩（今の石川県加賀地方）前田家に伝来した。



面裏



右斜め



左側面

・東京国立博物館所蔵の作品は所蔵番号を付した。